

佳作

家族の存在

山形県 米沢市立第二中学校二年 伊藤 清子

私の父、母、祖父は農家で米沢牛を育てている。それ以外にも田んぼや畑の仕事もしているので、一年中忙しくて休みがない。朝早くから夜遅くまで、悪天候の日も働いている家族は、とても尊敬する存在だ。しかし、休みの日に友達とは遊んでいるのに私は家族の手伝いをしなければならぬ。だから、農家の子供に生まれてきたことが嫌だった。

二〇二〇年三月、新型コロナウイルスにより小学校が休校になった。約三か月間、私は毎朝牛舎へ行って手伝いをした。掃除やエサやり、牛のブラッシングなど、毎日二時間ほどの手伝いだったが、腕や腰に疲労がたまり、今でも大変だったことを覚えている。

特に印象に残っていることは、牛の出産を見たことだ。出産は時間がかかり、スピード勝負となる。

家族で母牛が出産する様子を見守っていたとき、私は思わず、

「頑張れ！あと少し！」

と必死になって声を出していた。その時、新しい命が誕生することに感動し、農家は苦しいときもあるけれど、達成感ややりがいを感じられる職業だということに気が付いた。

「なんで農家として働こうと思ったの？体力的にも精神的にもきついはずなのに。」

中学生になった今、私がずっと疑問に思っていたことを家族に聞いた。祖父は、

「ブランド牛の名誉を守るのはもちろんのこと、沢山の人がお肉を食べて笑顔でおいしいと言ってくれるのがうれしいんだ。『医食同源』という言葉があるように、農家のおかげで人は命を繋ぐことができる。大切な仕事だと思って大変なときも乗り越えてきたんだ。」

「お父さんはじいちゃん姿を見て育ったけど、農家になろうと決めたのはいつ？」

「子供の頃、じいちゃんは家にほとんどいなくて農家は忙しそうだと思っていた。大学生のときに農家のアルバイトをして楽しいと思い、農家を継ぐ

ことにしたんだ。牛が健康に育ったときや安全なお肉を消費者に届けられたときは喜びをすごく味わえるよ。」

「お母さんは農業と関係なかったのに、なぜ農家の道を選んだの？」

「昔から動物が好きで、大学で畜産に興味を持ったの。牛も家族として子供を育てるように世話をしてくれるか、牛同士が仲良くしてくれるかを日々試行錯誤しながらね。」

三人とも明るい表情で話していて、農家の仕事に誇りを持っていることが伝わった。

私はこの経験を通して、改めて農家は重要な仕事を担っていることに気が付いた。前までは農家の子供で嫌だったけれど、今では胸を張って良かったと言える。また今の時代、若手農家が減っている。そのため、両親は地域の子供たちに農業の魅力を伝えたり、SNSなどを使ったりして、農業の良さをPRしている。将来、私は家族のようにやりがいを感じられて誇りを持てる職業に就き、何事にも全力を尽くせる人になりたい。